

シュティフターの「水晶」の sanft について

鈴木 善 平

Von “sanft” des Stifters ‹‹Bergkrystall››

SUZUKI Zenpei

「水晶」とその最初に発表された形である「クリスマスの前夜」の両者における、sanft という語の用いられ方を検討し、「水晶」に記された「おだやかな法則」のあり方を見る。

序

「水晶 (Bergkrystall)」の最初の形である「クリスマスの前夜 (Der heilige Abend)」⁽¹⁾ の書かれた動機について、地理学者フリードリヒ・シモニーは次のように記している。1845年、シュティフターは、シモニーの描いた氷河の洞窟の絵を見ていたが突然こう言った。「いま思いつきました。私はこの青い氷のドームのなかに昨日逢った子供のつれを置いてみましょう。蕾のようなその可憐さと、壮麗でものごとく、死のように冷たいこの居場所とは、なんという対照になることでしょうか。」⁽²⁾ 雪の山中をさまよひ、氷河の洞窟の中で一夜を明かす 2 人の子供たち、兄と妹の可憐さとけなげさの物語は、こうして生まれ、その年1845年の12月に雑誌「現代」に発表された。

シュティフターは、この「クリスマスの前夜」にも、他の作品の場合と同様、改良の筆を加えてやまない。既に1846年3月17日付、友人であり出版者であるグスタフ・ヘッケンアスト宛の手紙の中で、彼は次のように記している。「『クリスマスの前夜』の原稿がいつ必要であるかについてもお手紙をください。と言いますのは、あなたのなさろうとされる目的のために、私は原稿にさらに手を加えようと思っているからです。驚かないでください。このことでお仕事をはばまれることはありません。しかしこの物語はもっと美しく、はるかに美しく、もっと簡単にそしてもっと高貴にならなければなりません。(schöner, viel schöner, einfacher und edler muß die Sache werden)」⁽³⁾

1853年、短編集「石さまさま (Bunte Steine)」が出版された。この中に、「クリスマスの前夜」は、表題も

「水晶」と改められておさめられた。「石さまさま」を発表したシュティフターの態度は、その序文に明かに表明されている。彼は言う、「われわれは人類のみちびきとなるおだやかな法則をみつけることにつとめたい。」⁽⁴⁾

「クリスマスの前夜」が、改良の手を加えられて「水晶」となり、「石さまさま」におさめられる経過を以上のように見て来た。この経過から見て、「水晶」は、おだやかな法則をみつけることをねがうシュティフターの態度を、「クリスマスの前夜」よりももっと明確に表わしていると考えられる。今この小論で、私は「水晶」を「クリスマスの前夜」と比較対照し、sanft という語を取り上げて、両者におけるこの語の用いられ方を見、「水晶」におけるシュティフターのおだやかな法則の世界について考えたいと思う。

比較対照

I. まず sanft という語が、「クリスマスの前夜」には用いられており、「水晶」では用いられなくなった箇所から見て行くことにする。

…, dort senkt er (der Weg 筆者註) sich und läuft nicht mehr gewunden, sondern, weil der nördliche Abhang viel sanfter ist als der südliche, in einer einzigen fast geraden, wenn auch viel längeren Linie fort, bis er das Gschaidner Tal erreicht.⁽⁵⁾

この箇所あたりは、「水晶」は「クリスマスの前夜」よりも文章が少なく「もっと簡単に」なっている。後者では語数が 225 語ほどであるのに対し、前者は 145 語ほどに短縮されている。それは大巾に書き改められた

と言ってよい。単に *sanft* 1 語が用いられなくなったというだけのことではない。「クリスマスの前夜」のこの箇所と語句の対応する箇所を「水晶」に見つけることができない程である。そして「北側の傾斜は南側の傾斜よりもずっとゆるやかである」という表現ないしそれに類した記述も見られない。

次に「クリスマスの前夜」の

Statt einer Wölbung, die der Wall von unten gesehen versprach, das sie **sanft** hinübergehen und dann den ebenen abwärts führenden Schnee zeigen würde, stiegen aus dem Körper des Walles neue Wände von Eis empor, …⁽⁶⁾

という箇所は「水晶」では次の通りである。

Statt ein Wall zu sein, über den man hinüber gehen könnte und der dann wieder von Schnee abgelöst würde, wie sie sich unten dachten, stiegen aus der Wölbung neue Wände von Eis empor, …⁽⁷⁾

最後に「クリスマスの前夜」の

Es war mittlerweile zehn Uhr geworden, und da man über eine sonnige Fläche Schnees **sanft** abwärts ging, tönte das Glöcklein der Gschaidler Kirche, die Wandlung des heiligen Hochamtes verkündend. ⁽⁸⁾

という箇所は「水晶」では次の通りである。

Als man über diese Wiese ging, tönte hell und deutlich das Glöcklein der Gschaidler Kirche herauf, die Wandlung des heiligen Hochamtes verkündend.⁽⁹⁾

以上、「クリスマスの前夜」には用いられていて、「水晶」には用いられなくなった *sanft* は、3 箇所とも傾斜など地形的な状態に関して「ゆるやかな」というほどの意味で用いられていると考えられよう。

II. 次に「クリスマスの前夜」と「水晶」の両方とも *sanft* という語の用いられている箇所について見る。

まず「クリスマスの前夜」の

Aber aus dem **sanften** Drücken gegen seine Seite herüber merkte er bald, daß sie neuerdings entschlummert, und gegen ihn gesunken sei.⁽¹⁰⁾

という箇所は「水晶」では次の通りである。

Nach einer Zeit empfand der Knabe ein **sanftes** Drücken gegen seinen Arm, das immer schwerer wurde. Sanna war eingeschlafen und war gegen ihn herübergesunken.⁽¹¹⁾

次に「クリスマスの前夜」の

…es floß schimmerig durch die benachbarte Gegend, es sprühte leise und ging im **sanften**

Zucken durch lange Räume, …⁽¹²⁾

という箇所は「水晶」では次の通りである。

Es floß helle durch die benachbarten Himmels~~gegenden~~, es sprühte leise und ging in **sanftem** Zucken durch lenge Räume.⁽¹³⁾

sanft という語が、「クリスマスの前夜」と「水晶」の両方に同じく用いられているのはこの 2 箇所である。第 1 の箇所は、手塚富雄訳「水晶」には次のように訳されている。「しばらくすると、少年は自分の腕にやわらかくもたれてくるものを感じた。それが次第に重くなる。ザンナは寝入ったのだ。そして彼の方に倒れかかってくるのである。」⁽¹⁴⁾

「やわらかくもたれてくるものを感じた」というとき、*sanft* は触れるときに感じる感覚に関して用いている。第 2 の箇所の *in sanftem Zucken* は「静かにきらめきながら」と訳されている。⁽¹⁵⁾ この場合 *sanft* は視覚に関して用いられていると言えよう。

グリムのドイツ語辞典では、*sanft* の意味用法の説明はまず感覚に関するものから始められ、触覚、聴覚、視覚、嗅覚及び味覚の順に述べられている。そして一般化された意味用法がこれに続き、おだやかな、ゆるやかな等の用例が挙げられている。

III. 最後に、*sanft* という語が、「クリスマスの前夜」にはなくて、「水晶」において新たに用いられている箇所を見る。

まず

Der Sommer aber nimmt denselben (Schnee 筆者注) immer weg, und die Felsen glänzen freundlich im Sonnenscheine, und die tiefer gelegenen Wälder zeigen ihr **sanftes** Grün von breiten blauen Schatten durchschnitten, die so schön sind, daß man sich in seinem Leben nicht satt daran sehen kann.⁽¹⁶⁾

「水晶」のこの箇所は、「クリスマスの前夜」では *sanft* ではなくて *schillernd* の語が用いられていた。

…, so geht er (Schnee 筆者注) doch im Sommer wieder hinweg, die Felsen glänzen freundlich im Sonnenschein und die tiefer gelegenen Wälder zeigen ihr schillerndes Grün oder die breiten, tiefen, blauen Schatten, die so schön sind.⁽¹⁷⁾

「山すそにひろがる森は、やわらかな緑を見せる」⁽¹⁸⁾ というとき *sanft* は色彩について、すなわち視覚に関して用いられている。

次に、

Endlich nach langer Zeit hörten sie ein Glöcklein, das **sanft** und fein zu ihnen heraufkam und das erste Zeichen war, das ihnen

die niederen Gegenden wieder zusandten.⁽¹⁹⁾
そしてこの少しあとに

Da sie nach einer Weile über eine sanfte
schiefe Fläche abgingen, erblickten sie die
Siederalphütte.⁽²⁰⁾

という文がある。

「水晶」のこの両文の箇所はかなり書き改められ且つ語数もふえていて、「クリスマスの前夜」と逐語的に比較対照させることができない。「水晶」において新たに書かれたものであると言えよう。さて第1の文で鐘の音が「ゆるやかに、かすかに下からひびいてきて」⁽²¹⁾というとき、この sanft は聴覚に関して用いられている。これに対して、上の第2の文で「ゆるやかな斜面をおりて行くと」⁽²²⁾というとき、その sanft は地形的な状態について述べるのに用いられており、直接五感に関係して用いられているのではない。

「クリスマスの前夜」にはなくて「水晶」にだけ用いられている sanft の箇所はもう1例（2箇所）ある。それは「クリスマスの前夜」にはなく「水晶」において新たに書き加えられた場面である。

その第1は次の通りである。これは雪の山中をさまよひ、下りる道を探し求めていた2人の子供たちが、どうしても下りる道を見つることができず、反対にとうとう山の上へ来てしまったとき、兄コンラートが妹ザンナに言う言葉である。

“Wir sind jetzt bis zu dem Eise gekommen,”
sagte der Knabe, “wir sind auf dem Berge;
Sanna weißt du, den man von unserm Garten
aus im Sonnenscheine so weiß sieht. Merke
gut auf, was ich dir sagen werde. Erinnerst
du dich noch, wie wir oft nachmittags in
dem Garten saßen, wie es recht schön war,
wie die Bienen um uns summten, die Linden
dufteten und die Sonne von dem Himmel
schien?”

“Ja, Konrad, ich erinnere mich.”

“Da sahen wir auch den Berg. Wir sahen,
wie er so blau war, so blau wie das sanfte
Firmament, wir sahen den Schnee, der oben
ist, wenn auch bei uns Sommer war, eine
Hitze herrschte und die Getreide reif wurden.”
“Ja, Konrad.”⁽²³⁾

第2は次の通りであり、これは「水晶」の結びである。

Die Kinder aber werden den Berg nicht
vergessen und werden ihn jetzt noch ernster
betrachten, wenn sie in dem Garten sind,
wenn wie in der Vergangenheit die Sonne

sehr schön scheint, der Lindenbaum duftet,
die Bienen summen und er so schön und so
blau wie das sanfte Firmament auf sie
herniederschaut.⁽²⁴⁾

これは第1の文が再びここに繰返されているのにほかならない。あの山の上で少年コンラートが妹のザンナに言った言葉を、シュティフターは、今この物語を結ぶにあたって、再びここに記しているのである。

この第1と第2の文の中の、das sanfte Firmament における sanft は、五感と直接関係した意味において用いられているのではない。このことについては、あとでもう一度ふれる。また das sanfte Firmament についても特別に考えたいが、その前にここで sanft についてこれまでに見て来たことをまとめておきたい。

これまで見て来たところによると、「クリスマスの前夜」に用いられていて、「水晶」に用いられなくなった sanft は3例あった。そしてそのいずれも、地形的な状態について述べているもので、人間の五感とは直接関係しないものであった。

次に「クリスマスの前夜」にも「水晶」にも共に用いられている sanft は2例あり、触覚と視覚に関して用いられたものであって、五感と直接関係のあるものであった。

最後に、「クリスマスの前夜」にはなくて、「水晶」においてのみ用いられている sanft は4例であるが、そのうちの1例は地形的な状態について述べられたものであり、1例が das sanfte Firmament の sanft である。従ってこの2例は五感とは直接関係していないものである。残りの2例は、視覚と聴覚に関して用いられたもので、五感と直接関係のあるものである。

結局、「クリスマスの前夜」において用いられていた5例の sanft のうち、五感と直接関係のなかった3例は、すべて「水晶」では用いられなくなり、五感に直接関係した2例だけが、「水晶」にもひき続き用いられていることになる。また「水晶」には sanft は6例あり、そのうち2例は五感と直接関係のない用法であるが、そのほかの4例は五感と直接関係した意味において用いられている。

「水晶」に用いられた sanft は、五感に直接関係して用いられているものが少なくないと言ってもよいのではなからうか。シュティフターが、das sanfte Gesetz について語るとき、彼はそのおだやかな法則が、現実に見、耳で聞きそしてまた触れて感知することのできるものとして存在していることを確信していたのに違いない。

ここで das sanfte Firmament について考えたいと思う。先に、この sanft は五感と直接関係した意味において用いられているのではないと述べた。グリムのドイ

ツ語辞典のSANFTの項に, ein sanfter lenz, winter, ein sanfter himmel, sanfte luft という用例が挙げられている。その意味用法の説明は次の通りである。
 von außerhalb des menschen liegendem, besonders von den auf uns einwirkenden naturerscheinungen, naturkräften. 人間のそとにあるものについて、殊に我々に作用する自然の諸現象や自然のいろいろな力についていうのに用いられるこの sanft は、シュティフターの das sanfte Gesetz の sanft に近いのではあるまいか。sanft についてこう考え、そして更に、既に見た如く、das sanfte Firmament という言葉を含む結びの言葉が、前に語った言葉を繰返して語っているものであることを考えあわせるとき、das sanfte Firmament という言葉と、そして結びの言葉全体は、「水晶」の中で大きな意味を持っていることに気づく。かくて私は、das sanfte Firmament は das sanfte Gesetz の比喩であり、結びの言葉全体は das sanfte Gesetz の支配する世界の姿であると考えるのである。

結 び

子供たちと庭とふりそそぐ日の光と、花咲きかおる菩提樹ととびかう蜜蜂と、向こうに見える雪山と、そのすべての上にひろがる柔和な青空、これらのものを記してシュティフターは「水晶」の物語を終える。おだやかな法則は、柔和な空⁽²⁵⁾ のように美しくあまねく世界をおおい、我々に働きかけ我々を導びく。

おだやかな法則の支配するところ、雪山の2人の子供たちは、その分別と本能に従って行動し、生命を安全に保つことを得た。物語全体を通して語られる2人の子供たちの可憐にしてけなげな行動は感動的である。また子供たちは「いわば本能的に隠れ場を求めて」⁽²⁶⁾ あるいて行ったと記されている。

おだやかな法則の支配するところ、村人たちはこぞって2人の子供の救出に参加した。おだやかな法則は、「すべての人間は他のすべての人間にとって一個の寶石であるゆえに、万人が寶石としてまもられんことを欲する法則なのである」⁽²⁷⁾ からである。

おだやかな法則の支配するところ、自然もまた2人の子供たちの生命を安全に守った。「もし自然がその偉大な力をあらわして2人をたすけ、2人の身と心のなかに、眠りにさかろうことのできる力を呼びおこしてくれなかったら、2人はとうてい眠きにうちかつことはできなかったであろう。その誘いの甘さは、あらゆる理窟や抵抗のおよぶところではなかったのだから。」⁽²⁸⁾ と記されている。また、「風がまるでおこらなかつたのがおめぐみなのだ。百年たったって、またとこんなことはありつけない、ふしぎな雪降りだった。干し竿から濡れ紐がぶらさがるようなまっすぐな降りかただった。ちょっと

でも風がおこってみろ、子供たちは助かっていやしない。」⁽²⁹⁾とも記されている。

おだやかな法則は、五感を通して感知できる現実のものとして存在し、柔和な青空の如くにあまねく世界をおおい、人々をみちびく。シュティフターはこう確信し、この法則をみつけることにつとめたいと願うのである。

〔注〕

使用テキスト

Adalbert Stifter Gesammelte Werke

Hrsg. Konrad Steffen, Basel und

Stuttgart: Birkhäuser Verlag 1963.(GWと略す)

Adalbert Stifter Sämtliche Werke

Hrsg. Franz Egerer u.a., Hildesheim:

Verlag Dr. H. A. Gerstenberg 1972.(SWと略す)

Der heilige Abend

zusammen mit "Die Pechbrenner,"

Erzählungen in der Urfassung. Hrsg. Max

Stefl, Augsburg: Adam Kraft Verlag. (HAと略す)

水 晶 シュティフター作 手塚富雄訳

岩波書店 昭和36年

- (1) 訳は水晶103~104頁による
- (2) 水晶 104頁
- (3) SW X VII. 158頁 ゴシック部分原文は隔字体
- (4) 水頁 87頁
- (5) HA 28~30頁 sanft のゴシック化は筆者。以下すべて同じ。
- (6) 同上 39~40頁
- (7) GW IV. 220頁
- (8) HA 50頁
- (9) GW IV. 237頁
- (10) HA 45頁
- (11) GW IV. 225頁
- (12) HA 47頁
- (13) GW IV. 228頁
- (14) 水晶 62頁
- (15) 同上 67頁
- (16) GW IV. 190頁
- (17) HA 12頁
- (18) 水晶 18頁
- (19) GW IV. 235頁
- (20) 同上 236頁
- (21) 水晶 76頁
- (22) 同上 76頁
- (23) GW IV. 217頁
- (24) 同上 241頁
- (25) 水晶 82頁の訳による。
- (26) 同上 54頁
- (27) 同上 88頁
- (28) 同上 65~66頁
- (29) 同上 80頁